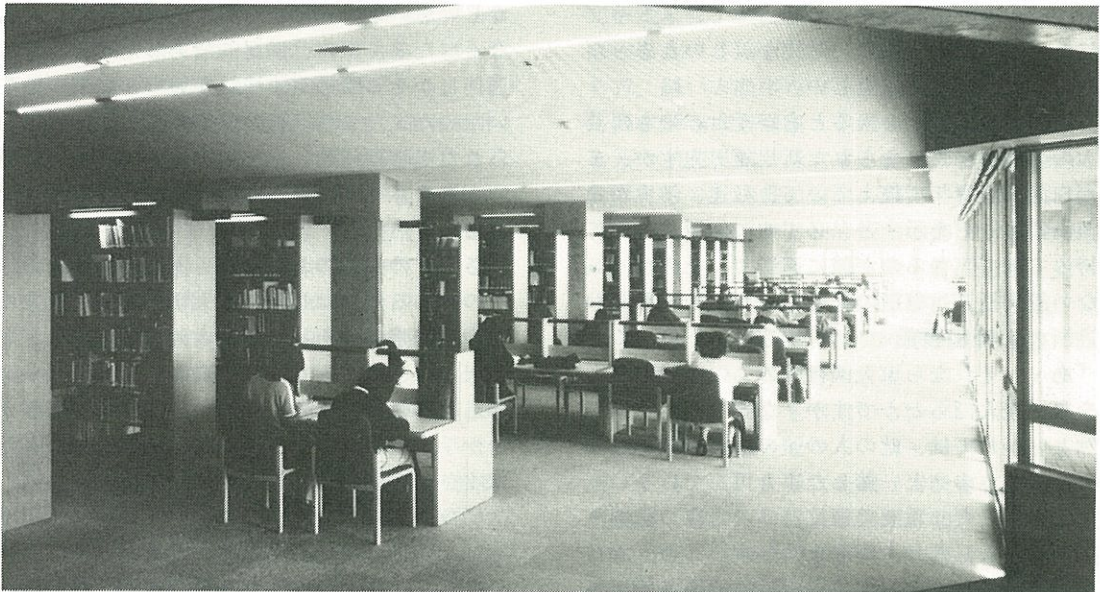


創刊号

Library Mate



創刊の辞

図書館長 伊藤 廣里

実践女子大学の新しい図書館は、渋谷時代のものより、遙かに近代的で明るい図書館へと変貌した。短期大学の図書館も、その増築工事が近く起工の運びとなる。

かかる時に呼応して、図書館報が創刊されたことは、まことに、よろこばしい。

「新しいブドウ酒は、新しい皮袋に入れるべきである。」

これからの図書館は、新しい時代の多様化するニーズに対応できる機関でなくてはならない。さりとて、あまり力みすぎて新奇な手段のみを迫ってはならないであろう。

そのことは、本学のように、多くの古典籍を

所蔵する伝統ある図書館については、特に言えるかと思う。

図書館は大学の心臓部である。

館員諸君の日々の仕事は、大学教育の一翼を担うところの胸をはることが出来る仕事である。

いよいよ、図書館報という松明に火がともされた。その炎は、これから高く燃えあがるときもあるし、また低くなる時もあるであろう。しかし、その炎は、もう消えることがあってはならない。

これから発刊を重ねる館報が、読者に裨益し、そしてまたよき伴侶になってくれることを、私は希望している。

私の図書館との出会い—文庫—

学長 吉川正巳

私の図書館との出会い。それは東京美術学校（現・東京芸大）の文庫である。1906年、帝國図書館の煉瓦造二階建倉庫一棟、木造二階建の閲覧室を併せて文庫といていたが、いつも、ひんやりと静まっていて、文字通り「螢の光、窓の雪」。照明も不十分で、今の実践女子大学図書館とは較ぶべくもない。早く窓際を占拠しないと図書の本版を見るのも苦勞する。冬の日窓から入る雪の照り返しが蒼白くて、ストーブにチラチラ燃える炎との対比が美しいと思った。情感の記憶が今も生々しい。

暗くて細い廊下を入ると右が受付。のちに芸大の美術学部長になられた新規矩男先生が、まだ白面の美青年で控えていて、私達、学生が希望図書カードを示すと、必ず他に何冊か添えて持って来て下さるのが誠に適切で、そのさり気ない読書指導は尊敬の的であった。それ許りか、近所の上野図書館や東大の蔵書にも詳しく「あ、それなら東大図書館のこの本の第一章を良く読んだらどうですか」などと、いとも平然といわれては、此の人の頭の構造は一体どうなっているの？と一驚した事も再三ではない。

文庫はまた、重要美術工芸品の倉庫でもあり、実物を手にしたり、模写・模刻することも許されていた。私も和田英作先生模の泰西名画を模写した事があったが、油絵科ならぬ私の難渋ぶりを見兼ねてか、折よく文庫に来られた和田三造先生が、キャンパス・下地の造り方を教えて下さったり、先輩の寺田春武氏（後に芸大の材料・技法教授）が手を取ってグレーズの技法など手ほどきしてくれたりして、文庫は正に、他学科との交流、師弟の人間的接触の場でもあった。

今、図書館は近代化して、図書もコンピューター検索、ビデオで各国、各シーズンのファッション・ショーを見る事が出来る大学もあるが、反面、私の学生時代のように、図書館の機能を通しての、心の触れあいも、なんとか残していきたいものだと、いつも思っている。



図書館の思い出

短大部長 内尾久美

9時閉館のベルとともに暗い夜道を家に急いだ。満ち足りた気持のよい足どりであったことを思いおこす。それは上野の図書館へ通っていた実践の専門学校時代のことである。その頃は比較的図書館に近かったし、また図書館の斜め前、博物館わきに京成電鉄の動物園前という駅があったので便利であった。それに時には父が犬の散歩がてら迎えに来てくれたこともなつかしい思い出である。さして勉強したわけでもなく、たぶんに自己満足的であったと思うが、週何日かそこで過ごす快さがいつか習慣づいていた。たまたま特別資料室で調査をつづけておられた当時担任のK先生の姿をかいまみては遠い大きな存在として畏敬の念をいただいたものであった。

さてその先生のおすすめもあって大学にいったのであるが、はじめての大学図書館の印象は多少の緊張感もあつてか、古めかしい造り、高い天井にどっしりした重厚な感じを受けた。しかし戦中戦後のあの頃の学生生活は書物もなかなか手に入れにくかったので、間もなく図書館はまさに下宿の延長線につながるものとなり、大切なそして落ち着いた居ごこちのよい場所となつていった。専門のものだけでなく結構好き勝手にいろいろと読みあさり、今思うと無駄というか廻り道が多かつたと思うのであるが、それがかえってなつかしいものになっている。

二年ほど前たまたま学会の折にかつての大学図書館跡を訪れた。（現在図書館は移転している）建物は残るものの窓硝子は破損し、がらんどうで荒れに荒れていた。昔の研究室への階段を上り屋上に出て一眺した思いは一入であった。変化とともに身をおくよりも所を離れ、時を隔てた者にとって懐旧の情は倍加するのであろう。

今本学の図書館は日野移転とともに近代的様相をもって誕生した。専門学校時代の図書室時代から思うとその発展はめざましい。短大生をも含めて利用者数は非常に増加したと聞く。大学の学びの支えの場であり、頼り所であり、また多くの刺激を受ける場として、分室ともどもますますの充実を願わずにはいられない。学生にとって図書館とのかかわりはどんなに大きな思い出となることであらう。

レイモンド・チャンドラー

ひと
「さらば愛しき女よ」(早川書房)

一般教育 森岡弘通

R・チャンドラーの作品に私は20代の頃大変夢中になり何度も読み返した。最初の出会いは、古本屋で買った雑誌「別冊宝石・チャンドラー傑作特集」で1955年頃だったと思う。当時の私は翻訳物の探偵小説のかかなりの愛読者だったが、彼の作品は本格派のものともるで構成が違うので慣れるまで若干時間がかかった。しかし慣れてしまえば彼の描き出す世界への感情移入は、その頃の私には比較的容易であった。主要な登場人物の息づかいや表情までが、奇妙な物悲しさをともなっていていつまでも脳裏にやきついていた。

チャンドラーのアメリカは、猜疑心・不信任感・金銭的欲望等に支配された人間の住む、荒涼たる世界であった。権力者や富豪は他人を思いのまま動かすことができるのに、平凡で力も富もない人間は、自分

思い出の一冊

『クォ ヴァデイス』

短大教職課程 鳥袋 勉

中学時代にシラーの『群盗』を読み、すっかり彼に惚れ込み、大学ではドイツ文学を専攻したので、思い出の一冊は当然、『群盗』になる。しかし、現在、大学生相手の職業に従事しているので、私が大学時代に感銘を受けた一冊を記してみたい。ポーランドの作家シェンケヴィチの『クォ ヴァデイス』である。

“Quo Vadis, Domine?”(「主よ、何処へ行き給う」)私がこのラテン語に接したのは、高校1年次の世界史の授業においてであった。担当の西平先生は、古代ローマ帝国におけるキリスト教の浸透と迫害・弾圧の過程を「ローマ炎上」と表現されてから、この小説を紹介された。

宗教にはまったく興味、関心がなかったので、この小説の存在を忘れていた。大学生になってから書店で大部のこの小説を見つけ、世界史の授業のなつかしさが先に立って購入した。

キリスト教に救いを求める以外に希望のない

の人間らしさを犯罪という形で表現せざるをえない残酷で散文的な世界であった。しかし彼にはシニシズムやニヒリズムへの傾斜はなかったと思う。ウィットに富んだ会話や主人公のフリリップ・マーロウのモノローグには良質のセンチメンタリズムにつつまれて、社会改革へのかすかな期待や人間の相互信頼への燃えるような思いが、確固として存在していた。そこにダシール・ハメットと異なり、ロス・マクドナルドが模倣しえなかったチャンドラー特有の雰囲気があり作風があった。日本にもチャンドラーばりの探偵小説を書く人は何人かいるが、この雰囲気を再現できた人はない。

最近出版されたシェイクスピアの研究書を読んでいたら、その中の一論文の各節のタイトルがチャンドラーの作品名になっていた。「何とこのことをしてくれるのだ」といささかやりきれない思いを抱いたが、図書館報にチャンドラーを書くのも趣味の悪さでは全く同罪であろう。

しかし今年はチャンドラー生誕百年、それに免じてチャンドラー・ファンも許してくれると思う。



奴隷、迫害のなかで愛を昇華させる青年と乙女、体制と信念のはざままで苦悩する政治家、布教活動に東奔西走する使徒ペテロそして残酷な迫害を加える皇帝ネロの姿が生き生きとして描かれていて、まさしく一大絵巻の観を呈している。

ペテロは受難者の忠告に従い、ひとまずローマを去る決意をし、アッピア街道をぬけて小高い丘にたどりつく。すると、前方に光につつまれたキリストが現われ、近づいてくる。地にひれ伏してペテロは呼ぶ——「クォ ヴァデイス、ドミネ」。キリストは「なんじがわが民を見ずてるなら、我は再び十字架にかけられんがためローマへ行く」と答える。ペテロは自己の行為の非を悟り、決然として迫害と処刑の町ローマへと引き返していく……。

内容のすばらしさもさることながら、私が「思い出の一冊」とするのは、この小説を契機として東ヨーロッパの文学に接したからである。外国文学といえばドイツ、イギリス、フランス、アメリカ、ロシア文学しか頭になかった。この小説は東ヨーロッパ諸国にもすばらしい文学が存在することを教えてくれた。



図書館サービスの概要

図書館で一番肝腎なことは、どの資料がどこにあるかを明らかにすることであるとすれば、獲得方法さえ整えば、理念的にはあらゆる資料を所蔵するか、あるいは世界中のどこからでも、求める資料情報を得ることが可能なはずです。図書館を利用する人はあらゆる資料に接したいと思うだろうし、図書館は可能な限り情報を提供したいと考えています。

ところが、図書館は本を貸してくれるところだという認識はされていますが、その他にどのようなサービスが行われているかあまり知られていないようです。

そこで今回は、図書館では〈どのようなサービスをしていて〉〈何ができないか〉を述べてみます。

どのようなサービスをしているか

①館内閲覧・館外貸出

②希望図書を購入

③文献複写（コピーサービス）

意外にも当然ではなく、著作権法上の著作権の制限によって認められている行為に過ぎません。当館では個人のノート類の複写は受けつけていません。

④図書館施設利用案内

「利用手続」「目録の見方」「図書の配置方法」等は図書館利用に不慣れな人には分かりにくいと思います。慣れて覚えるしかありません。分からないことは何時でも何回でもお尋ね下さい。

⑤文献探索・文献所在調査

求める文献を探索・調査します。当館に未所蔵であってもあくまでも追求し、おこたえます。

⑥図書館相互貸出（相互協力）

求める文献が当館にない時、所蔵している

他館に協力を依頼して、求める文献を入手することができます。制度としてはまだ確立されていませんが、国の内外を問いません。

(a)他館資料の閲覧

直接他館へ行って閲覧させてもらうことができます。「資料利用依頼書」を必要とする場合が多く、依頼書を持参せず勝手に訪れた利用者がいて苦情を申し込まれたケースもありました。（学生・教員を問いません。）

(b)文献複写

求める文献をコピーで他館より送付してもらうことができます。実費は個人負担です。

(c)図書相互貸借

求める文献そのものを直接送付してもらうことができます。意外にも利用者の中にはどこの図書館でも貸出可だと思込んでいる人がいますが、残念なことに貸出してくれる図書館は非常に少ないのが現状です。

何ができないか

- ①宿題の手伝い
- ②クイズの回答
- ③推理、推論及び価値判断を求めるもの
- ④参考文献一覧表の作成
- ⑤プライバシーに触れるもの

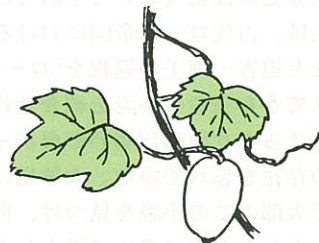
求める図書が貸出され、予約すべきか否か迷ったあげく、「誰が借りていますか」と問われることがあります。プライバシーに関わることなので答えられません。

⑥公刊されていない個人情報

（住所・電話番号等を含む。）

他館で行っているところがあり、本館で行っていないサービス

各種データベースからの文献情報提供サービス。



短期大学図書館

指定図書について

短期大学図書館では、各先生方が講義に必要な図書として指定した「指定図書」のコーナーを、カウンター前に設けています。3冊ずつ用意されており、1冊は禁帯出としているので、いつでも閲覧できます。なお、貸出期間は3日間です。

本年度新たに指定された図書

久武和夫教授 物理学

- 420-F66 生活の中の物理 藤成敏幸著 東京教学社 1988
 420.2-To62 物理学とは何だろうか上, 下朝永振一郎著岩波書店1979(岩波新書)
 427-H61 電気と光 ポール G. ヒューエット著 黒星螢一, 吉田義久訳 共立出版 1988

内尾久美教授 国文学基礎演習

- 911.1351-N86 古今集総索引 西下経一, 滝沢貞夫編 3版 明治書院 1968
 911.1358-Ta35 新古今集総索引 滝沢貞夫編 明治書院 1970

図書館の仕事〈1〉

本の配列

“図書館”という文字、そして“トショカン”という発音が何か堅さを感じさせているようですが、ライブラリイならちょっと柔らかく聞こえそうです。でも昨年の一平均利用者は、約490人となっており、年間では約104,000人が利用し、貸出冊数も約36,000冊になっています。蔵書も現在は大学・短大を合せて約30万冊を所蔵し、その機能する内容は高いものと思われま。こんなに沢山の蔵書のほとんどがオープンで利用できるのがこの図書館の特徴です。これらの蔵書は日本十進分類法に従って配列されており、自分が必要とする分類を覚えていれば大抵の用は足せるというものです。分類表は館内にも表示していますし、「利用ガイド」にも網目表が出ていますので一度手にとって見て下さい。この分類に著者や書名などの記号を組み合わせたのが請求記号で、図書はこの記号順に正しく配列されています。

一階閲覧室側にある書架上の図書は利用頻度が高く、本が活着ていることを実感として受けとれます。そして汚れや傷みの目立つものほど多くの人が必要とし、毎日のように書架から引き出されたのでしょう。この本がまた明日も使われるためには、同じ所に戻されるのが前提になります。どうか書架から出した本は元の所に戻してやって下さい。前にもふれたように請求記号は数字とアルファベットの組合せによる簡単なものです。戻った本は調査・研究という需要にまた供給できるというものです。

図書館では毎月一回休館日をとって本の配列を正しくするために、“配架整頓”をしていますが、実はこの配列の乱れが非常に多いのです。書架の上から下まで、左から右へと目を素早く移して“配架ミス”を発見し、所定の場所へ戻してやります。きっと授業時間ギリギリまで利用していて、元へ戻す暇もなくポンと置いて行ったのだろうと想像しています。どうか一人一人がほんの少しばかりの時間を図書館に割いて下さい。そうすることによって本はあるべき所に収まり、利用する人も場所を得た本も安心できます。

ブック★ストック

—歳書ガイド—

今回は本学から出版されている定期刊行物を、大学・短大と学園関係に分けて紹介します。

大学・短大

実践女子大学文学部紀要（実践女子大学・実践女子短期大学）第1号（昭和27.10）～
実践女子大学家政学部紀要（実践女子大学）第1号（昭和27.10）～
実践文学（実践文学会）1号（昭和23.7）～42号（昭和46.3）
実践国文学（実践国文学会）第1号（昭和47.3）～
実践英文学（実践英文学会）第1号（昭和46.12）～
実践女子大美学美術史学（実践美学美術史学会）第1号（昭和61.3）～
実践女子大学MUSELOGY（実践女子大学博物館学課程）第1号（昭和62.4）～
実践女子短大評論（実践女子短期大学）第1号（昭和53.3）～
実践英米文学（実践英米文学会）1号（昭和47.1）～
年報（実践女子大学文芸資料研究所）第1号（昭和57.3）～

以上の10誌が大学・短大・研究所から刊行されていますが、「実践文学」だけが42号で終刊になっています。この雑誌は、昭和36年に実践文学会を設立すると同時に創刊されましたが、日頃の研究の質の高さと量の増大を今後に生かすため、本誌を発展的に解消し、「実践国文学」「実践英文学」「実践英米文学」という三誌が独自性を発揮することになりました。

紀要も第1集は「実践女子大学紀要」といい、全学科課程を網羅したものでしたが、第2集から「国文学・英文学」と「自然科学・家政学」に分けて刊行され、前者は第10号（昭和42.3）から、後者は第7号（昭和44.12）から学部名を冠した現行の誌名となりました。なお、文学部の紀要のみ大学と短期大学の共編で続けられています。

「実践女子大学美学美術史学」は、学科が設置された時から刊行されましたが、本学独自のカリキュラムに従って学生の教育資料とすること、研究論文や啓蒙的な論文も加味することなどを編集目的にしています。

「実践女子短大評論」は短期大学独自の研究紀要として文学および家政の両学科による総合研究論文誌です。

学園・学友会・同窓会・後援会

実践女子学園広報（実践女子学園）・実践だより（実践女子大学・実践女子短期大学）・那与竹（桜同窓会）・りんどう（実践国文科会）・英文科会だより（実践女子大学英文科会）・会報（実践女子大学・実践女子短期大学後援会）・文藻（学友会文藻編集部）・調一歌集（短歌研究会）・軌跡（学友会文化部連合会）・体育連合会誌（学友会体育連合会）・ときわぎ（学友会新聞委員会）

この他にもいくつかありますが、大学図書館には所蔵されていません。

「文藻」第1号（昭和27.7）～第19号（昭和38.7）は学友会が発刊し、収載分野は多彩を極めていきます。号を重ねるに従い、性格もはっきりとし、創作・翻訳・特集なども組まれています。

「調一歌集」第2号（昭和28.3）～第12号（昭和39.1）は、在学生と卒業生の緊密なつながりによって編集されたもので、特に学生の短歌創作に大きな刺激を与えたことが作品からうかがうことができます。時を経ると共に短歌研究会の伝統が形成されたものと思われ、図書館の一隅を占める同窓生著作文庫の歌集も、当時からの執筆活動が集大成されたものでしょう。

Library Mail

— 収書 ガイド —

小川芋銭画集鈴木進監修（日本経済新聞社 昭和63年）芋銭は“カッパの芋銭”と称されるように、日本のにおいが強い画家である。図版は第1部 風景・人物、第2部 水魅山妖、第3部 画帖・画卷他に構成されるが、鈴木進著「文人芋銭」と弦田平八郎著「小川芋銭の画世界」の二つの解説と論文が本書の絵画を見るにあたって関心深く読めるところである。ほかに芋銭の年譜、文献目録、図版目録がある。

マクミラン聖書歴史地図(原書房 昭和63年) The Macmillan Bible Atlas, 1977を基にした日本語訳版である。地図製作を専門とするエルサレム・カルタ社のヘブライ版『聖書歴史地図—旧約時代』(1964)と、『第二神殿時代、ミシュナ・タルムーバ時代の歴史地図』(1966)の2巻をマクミラン社が合せて1968年に英語版として出版したが、本書はそれの改定版である。

豪華〔源氏絵〕の世界 源氏物語監修：秋山虔，田口栄一（学習研究社 昭和61年）

物語を206枚の絵（絵巻、屏風、画帖、色紙、扇面、断簡など）から3部構成で編集したものである。解説文の「源氏絵の系譜—主題と変奏」（田口栄一著）は本書をより一層理解しやすくしてくれる。掲載された源氏絵は20を越える機関や個人の所蔵に係わるが、パーク・コレクション、ロンギ・イースタンファインアート、メトロポリタン美術館などの海外収蔵品も多い。源氏絵年表、源氏絵帖別場面一覧、掲載作品一覧を巻末に付す。

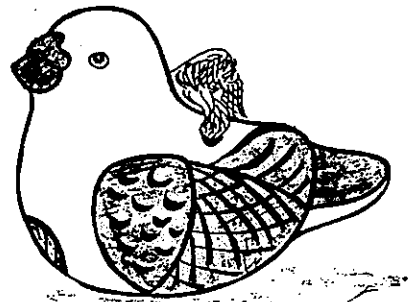
カーク・オスマー 化学大辞典（丸善 昭和63年）原著は本編24巻、補遺2巻の大冊であるが、この全項目を取捨することなく記述を縮めながらも図表、チャート、参考文献を付したコンパクト版である。

折口信夫事典西村亨編（大修館書店 昭和63年）内容は折口学への道、折口名彙解説、著作解題、研究文献目録、その生涯、学問的足跡、ほかに評伝、略年譜、事項索引、研究文献目録著者索引がある。折口名彙解説は、まれびとなど37の主要項目を中項目形式の事典としての体裁をとっている。

日本の労働着アチック・ミュージアム・コレクション中村たかを編（源流社 昭和63年）本書は、現在国立民族学博物館が収蔵する標本資料のうち農作業衣225点について、12人の専門家による共同研究書である。労働着の地域性と着装、農業生産と在来労働着、測色、一部式と二部式上衣、刺し子衣、かぶりもの、手覆い、脚絆などの各項を形状、寸法、材料、構造、裁ち方、縫い方順序などを記述している。

西本願寺本万葉集（主婦の友社 昭和59年）お茶の水図書館が所有する典籍の影印本である。特徴として、詞書の書始めが高く歌の本文は低く記されていること、片仮名の傍訓が原文の右に付されていること、墨・朱・青の三種を用いて訓を区別しているなどの点がある。仙覚の自筆本は現存しないが、仙覚の訓説を最も良く伝える古写本の一つとして重要である。

なお、その他にも下記のものが入り込んでいる。文字の起源カーロイ・フェルデシ＝バップ著 矢島文夫、佐藤牧夫訳（岩波書店）合本守貞漫稿（喜多川守貞自筆影印）朝倉治彦編（東京堂出版）江戸東京学事典小林新造ほか編（三省堂）モースの見た日本—モースコレクション日本民具編（小学館）図書館情報学ハンドブック（丸善）緋の道—藤本均コレクション（毎日新聞社）原色茶花大事典（淡交社）材料料理大事典（学習研究社）日本家政学文献集1979～1986（日本家政学会 昭和63年）



大学図書館

開館日

1月11日(水)～2月18日(土)

開館時間

1月11日(水)～2月3日(金)：平常どおり
2月4日(土)：9時～16時

休館日

2月8日(水)～2月11日(土)(入学試験)
※2月6日(月)以降の開館日については、後日、お知らせします。

試験期間中の貸出

1月11日(水)～2月2日(木)：1日貸出

卒論・修論用貸出

家政学部の4年生と大学院2年生を対象に貸出を行います。

受付：1月13日(金)まで

返却日：1月31日(火)

冊数：10冊

1989年の開館予定：4月6日(木)より

短期大学図書館

開館日

1月11日(水)～2月4日(土)

試験期間の開館時間

1月11日(水)～31日(火) 開館時間を延長します

月～金：9時～17時45分

土：9時～16時

2月1日(水)～3日(金)：平常どおり

2月4日(土)：9時～16時まで

※2月6日(月)以降の開館日については、後日お知らせします。

試験期間の貸出 大学図書館と同じです。

春休み特別貸出

短大一年生を対象に特別貸出を行います。

受付：2月1日(水)～4日(土)

返却日：4月10日(月)

冊数：5冊

1989年度の開館予定：4月6日(木)より

編集後記

お願い—卒業生のみなさんへ

後期試験終了後は、最終返却日を設定し、貸出しを行います。毎年4月になっても返ってこない図書が何冊もあります。

カウンターでは、日頃から未返却のチェックをしていますので、呼出しを受けた経験のある方もいるでしょう。なかなか連絡がとれずに、最後はご家庭の方の手をわずらわせるようなこともあります。

昨年も、紛失で現物弁償ということだったので、が引越の荷物の中からみつかったというので、お父様から丁重な手紙とともに届きました。

春休みになると、教室やロッカーに忘れられた図書が、必ず何冊か届きます。みなさんがお世話になった図書は、又、来年も利用する人達がいることを忘れないでください。

図書館報、Library Mate を発刊することになりました。Library Mate は、図書館のこと、図書のことなど、みなさんに少しでもお伝えすることができたら、という思いの中から生まれました。

御多忙のところ、原稿を御寄せ下さいました、先生方に心より御礼申し上げます。

なお題字は、短大図書館の安達が担当しました。(M・O)

Library Mate 創刊号 1989年1月

発行所 実践女子大学図書館
東京都日野市大坂上4-1-1
実践女子大学図書館短期大学分室
東京都日野市神野1-13-1
発行責任者 伊藤 廣里 明